

平成28年度 校内研究計画

1 研究主題

意欲的に活動し、学び合う児童の育成
～体験的な活動を生かした授業づくりを通して～

2 主題設定の理由

本校は、平成24年度より、国頭村がすすめている、学びの共同体の理念を生かした「聴きあい、学び合う力」の向上をめざした指導方法の研究に取り組み、授業実践を重ねてきた。その結果、一つの問題にじっくり取り組んだり、互いに聴き合ったり、自分なりの言葉で発表するようになってきた。

しかし、極小規模校で在籍数の少ない本校においては、多様な考えを出しあったり、練り合い、深め合う場面を設定したりすることが難しく、特定の児童の意見で授業や話し合いが進んでしまうことも少なくない。

そこで、隣接校である佐手小学校や奥小学校との集合学習を実施し、課題解決に努めてきたが、それでも1学年で2～5名程度ということもあり、関わりあいが少なく、練り合い、深め合うことなど十分とは言えない。このような実態から、体験的活動を取り入れ、実体験に基づいた学びを展開することが、より学びを深め、広がりにつながると考える。体験的活動は、豊かな人間性、自ら学び自ら考える力などの生きる基盤となり、児童の成長の糧としての役割が期待される。

具体的には、

- (1) 実生活などへの興味・関心・意欲の向上
- (2) 問題発見や問題解決能力の育成
- (3) 思考や理解の基盤づくり
- (4) 教科等の「知」の総合化と実践化
- (5) 豊かな人間性や価値観の形成

等があげられる。

以上のことから、今年度は、保護者や地域の方を招いて体験的な活動を保証し、児童の主体的な学びを活性化していきたいという願いのもと、主題を「意欲的に活動し、学び合う児童の育成」、サブテーマを「体験的な活動を生かした授業づくり」と設定し、研究を進めることにした。

3 研究仮説

学習過程において、体験的活動により得た知識や考えを基に、保護者や地域人材の活用及び体験活動を通して、児童の学びを活性化させることにより、意欲的に活動し、学び合う児童が育成されるであろう。

4 研究方針

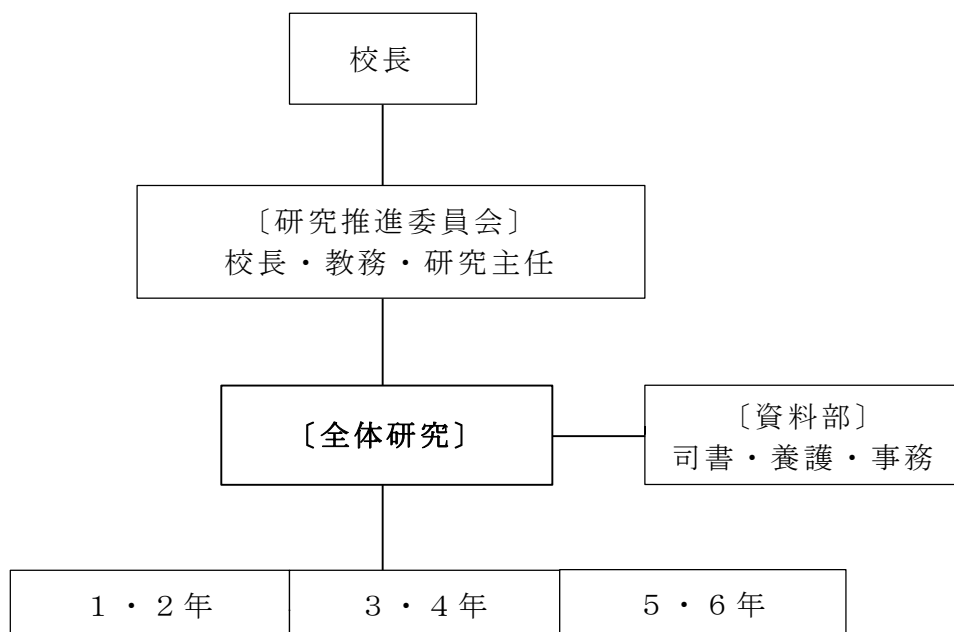
- (1) 学校教育目標、学校課題達成のための研究を推進する。
- (2) 校内研究と学力向上対策を連動させる。
- (3) 全国学力・学習状況調査、沖縄県学力到達度調査の結果を考察し、研究に生かしていく。
- (4) 研究授業は全教諭が行い、日々の授業においても職員間で、授業を参観し、授業力の向上に努める。

- (5) 授業研究会、理論研究会では講師を招聘して研究を深める。
- (6) 近隣校との交流研究会にも参加し、情報を収集したり、視野を広げたりする。

5 研究内容

- (1) 「学びの共同体」についての理論研究
- (2) 授業実践
- (3) 語彙力を高めるための実践

6 研究組織



7 研究計画

回	月 日	研 修 内 容	担 当 者	事務所主事	委員会主事
1	4月 5日(火)	新任職員研修会 「学びの共同体」について	教育委員会		
2	4月 15日(金)	研究テーマについて 研修計画について	研究主任		
3	5月 6日(金)	研究テーマに沿った授 業の進め方について	研究主任		
4	5月 26日(木)	授業研究会 年			
5	7月 7日(木)	授業研究会 年			
6	9月 9日(金)	授業研究会 年			

7	10月20日(木)	授業研究会 年			
8	11月18日(金)	国頭村へき地教育研究 発表会	奥 小		
9	12月9日(金)	校内研修のまとめ (成果と課題)	研究主任		
10	1月12日(木)	研究集録について	研究主任		
11	2月8日(水)	次年度に向けて	研究主任		

※ 職員の要望や必要に応じて研修内容を選択してよい。

※ 主事招聘の授業においては、指導案を作成し検討会をもつ。個人研修の授業の場合は、授業デザインシートを作成し、校内の職員で授業を参観し省察をする。

※ 近隣の学校とも積極的に交流研修をもつようにする。

8 研究の実際

(1) 子どもとの対応を変える

① 教師のテンションと声のトーンを下げて対応する。

声の小さい子、弱い子への配慮、小さい声でも聴けるようにしたい。
しっとり静かで安心できる授業を目指そう。深い沈黙と思考。

② 教師が一方的にしゃべらない。(教室の声 → 教師 20% 子どもの声 80%)

教師の仕事は 「きく・つなぐ・もどす」 に徹する、教師の発信から受信へ
「教える」の発想から、「気づかせる・感じさせる」発想への転換

③ 教師はゆっくりしたテンポで話す。教師の発問や子どもの発表後の「間」を大切に
にする。

「じっくり待つ」とは・・・しっかり考えさせる「間」を与えることである。

④ 子どものかかわりを柔らかくにしてじっくり対話する。

子どものつぶやきや、顔の表情まで見取りたい(「何か言いたそう」の支援)

⑤ 子どもを怒って統制しない。大勢の前で一人を怒らない。(子の尊厳)

放課後や休み時間等に、個別にゆっくり静かに過ちを悟らせたい。

(2) 学習形態の配慮「コの字」型の机配置、「グループ活動」を位置づける。

① 「コの字」型に配置することの意義

ア 教師も、子ども同士も学級全体の各々の表情を見取りやすい。

イ 児童が互の意見が聴きやすい。(仲間の意見や考えを聴くための机配置である)

ウ 教師と子どもの距離が縮まりつぶやきや、子どもの困り感に対応しやすい。

② 「小グループ活動」を位置付けることの意義

ア お互いの考えや意見のすり合わせの場として設定する。

みんなの考えを一つにまとめる活動ではない。

イ 一斉授業では発表できない子でも、近くで小さい声で話せる機会として設定する。特に弱い子への配慮である。「分からない」ことを聴ける雰囲気づくりが大事。

※ 机の高さは可能な限り統一する(イスで高さ調整)。机は隙間なくくっつける。
男女混合の編成にする(絶対)。机の横には物を提げない。グループ間の距離を

おく。

※ グループ活動中、教師は話し合いのケアに徹する。

(3) まずは、「聴き合う学級づくり」に取り組む

- ① 子ども同士が、互いの話を聴き合う雰囲気をつくる。(例 一時徹底や教室掲示)

「教師の話し」の聴き方よりも、子ども同士互いの話しの聴き方の指導である。

- ② まずは、話の聴き方の手本として教師が子どもの話を「眼」「体」「心」でしっかり受けとめて聴く姿勢を示す。

子どもの発表途中に決して口を挟まず、すべて受け入れる。

- ③ 子どもの目線に合わせるために、教師の位置を低くする(イスに座る)。

声の小さい子やつぶやきには、教師が寄り添って聴いてあげる。

- ④ 困っている子どもが他者を依存しやすい雰囲気をつくる。

「わからない」「教えて」「意味分かん」が日常に言える(認められる)ようにしたい。

9 授業研究

(1) 公開授業・授業研究会のねらい

教師が互いの授業を気軽に公開し、子どもの学びの姿に視点をあてた授業の振り返り(授業研究会)をすることにより、「教師の授業力向上」に資することを目的とする。また、公開授業においては、地域や保護者に対して「開かれた学校づくり」の一取り組みとして実施する。

授業研究会：校内において同僚による授業研修会

公開授業：学校内外の参観者を受け入れて授業を公開する。(全教室一斉)

代表授業：公開授業等において一人教師による授業公開と授業研究会

(2) 授業研究の方針

- ① すべての教師が実施する。

◎ 校内全体研修(主事招聘授業)か、○個人研修(校長・教頭・空きの教師)

- ② 授業者は、授業デザインシートを作成し参観者へ配布する。

- ③ 授業の準備については、個人と非公開に同僚との相談レベルで行い、授業後の省察に重きを置く。(同僚は授業についてアドバイスを求められたら必ず相談にのる)

- ④ 校内研修のテーマ「互いに学び合う」授業の構築にこだわる。(テーマからそれないように)

- ⑤ 参観者が少ない場合はビデオに収録し、後日アドバイスをいただく。

(注) 見せるための「すごい授業」でなく、日常の授業の公開を心がける。

(3) 授業後の研究協議

- ① 参観者は、割りあてられた班を中心に観察したことを話す。

- ② 参観者は、「どこで『学び』があったか。どこで躓きがあったか。」など授業研究協議の視点と論点を踏まえて観察したことを話す。

- ③ 研究協議では子どもの固有名詞(名前)で話す。

- ④ 全体の研究協議では授業者に対し必ず、アドバイスや自分にとっての「学び」を話す。

- ⑤ 協議会プログラム・・・(形式的な言葉のやり取りはやめる。)

ア 授業者の説明

イ 参観者の感想及び助言(すべての参観者から一言いただく)

ウ 質疑応答(授業者への直接質問や、日常授業からの質問等)

エ 質疑や意見の中から協議課題を1つに絞って全体で協議する。